

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	木内 靖
学位	博士(学術)
学位記番号	新大院博(学)第101号
学位授与の日付	令和3年3月23日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
博士論文名	茅ヶ崎海岸「浜下り」における物語空間の浮遊性 —〈茅ヶ崎甚句〉と「円蔵神楽」を中心に—
論文審査委員	主査教授 伊野 義博 副査 准教授 飯島 康夫 副査 准教授 中本 真人

博士論文の要旨

本論文の目的は、茅ヶ崎海岸「浜下り」神事の伝統に見られる神輿担ぎ唄〈茅ヶ崎甚句〉と宵宮神事で奉納された神代神楽「円蔵神楽」の二つの民俗芸能を論点の核とし、地域住民が神社信仰を背景とする「禊祓」の文化基盤を媒として音楽や芸能の送り手と受け手の間で展開する「浮遊性」の機能を解明することにある。そのために、先行研究の検討からキーワードとなる「浮遊性」につながる概念を導き出し定義づけるとともに、それを対象となる芸能に関して各章で設定した課題から裏付け、論証する方法を採用し、論を展開している。

本論文は、序章、第一章～第四章、終章で構成されている。

序章では、研究の全体を概観する。まず、〈茅ヶ崎甚句〉と「円蔵神楽」、その背景にある「浜下り」神事を紹介し、当該地域においては、民間信仰の伝承形態が鶴嶺八幡宮を中心に八幡宮放生会、御霊会など中世鎌倉と関わりの深い基層文化が形成されていたことを述べる。そして、〈茅ヶ崎甚句〉と「円蔵神楽」の表現する「物語空間」(送り手と受け手の間で相互作用するコンテキスト)は、「浜下り」のような「禊祓」の文化が媒となり、中世鎌倉との関係性の中で成立、展開していたとする。その上で、この「物語空間」においては、地域共同体の人々の頭の中で口頭常套句や筋書きが「浮遊する」特性＝「浮遊性」がみられ、この特性を先行研究から導き出した「共感覚」、「間テキスト性」等から読み解きつつ、その機能の実際について解明することが目的であるとする。

続く第一章から第四章では、〈茅ヶ崎甚句〉と「円蔵神楽」を巡る種々の課題について、章毎に歴史的文脈、楽曲や演目のテキスト分析等をおこない、「浮遊性」を論証している。

第一章では、民俗学、音楽学、音楽教育学における先行研究の検討をもとに、民俗音楽や民俗芸能の「統合化」の動きと村落祭祀に見られる共同体の人々の間で機能する「共感覚」の概念を対立させながら考察するとともに、「語り物の機能における音楽概念」「口頭常套句説」「間テキスト性」等の関連用語から「浮遊性」が説明される。

第二章では、茅ヶ崎海岸浜降祭の神輿担ぎ唄〈茅ヶ崎甚句〉を対象とする。ここでは、浜降祭と〈茅ヶ崎甚句〉の先行研究を検討し、歌詞の多様性を生む唄の展開を支えているメカニズム解明の必要性から、「マトリクス」「タンスのリズム」「間テキスト性」などの用語を用いつつ、歌い手の多様なテキストの読み取りと消化、音楽の組織化、表現の状況を説明する。さらに、〈南湖下町甚句〉、〈上赤羽根甚句〉の事例を比較検証し、〈茅ヶ崎甚句〉の類型表現が歌い手の頭の中に蓄えられている、あるいは歌い手の所属する共同体の人々に存在し浮遊する特性の実際を浮き彫りにする。

第三章では、〈茅ヶ崎甚句〉と幸若舞曲〈浜出〉との関係性に焦点が当てられる。ここでは「浜下り」神事の由来と現在の浜降祭の歴史的な脈を説明し、鶴嶺八幡宮浜降祭と鎌倉鶴岡八幡宮浜降式の相関性を比較考察した上で、幸若舞曲〈浜出〉および関連作品と源頼朝、鎌倉党等との接点が論じられる。その上で、〈浜出〉の詞章と〈上赤羽根甚句〉の詞章に共通する類型旋律から、そこに歌われる物語空間と節回しの特性を比較検証し、双方に見られる江の島遙拝の描写や下降する節回しの特徴等を指摘する。これらの検証から、〈浜出〉と〈茅ヶ崎甚句〉で歌われる物語空間において「浮遊性」が機能していることを論証している。

第四章では、茅ヶ崎市円蔵の神楽師高橋鯛五郎が茅ヶ崎海岸地区とその周辺の寺社祭礼などで奉納した「円蔵神楽」と「浜下り」神事の地域的特性が検討される。まず、本地域の民俗信仰が鶴岡八幡宮との基層の対比の上に、八幡信仰と御霊信仰の二つの系統から形成されたことを示し、これに基づく「禊祓」の伝統文化が円蔵神楽の成立と存続の基盤となったことを説明する。次にこの神楽が、六所神社社役を務めた「越前幸若舞」大橋家、土御門家陰陽師「千寿万歳」萩原家などにつながる近世神事舞太夫の神代神楽を継承した点に着目し、円蔵神楽がこの地域における新たな正当性を獲得してきたことを述べる。同時に、神楽の演目、構成、内容等の分析を通して、「巫女舞」と「曲舞」の要素を合わせ持つ「禊祓」の舞としての「円蔵神楽」の特性を描き出している。これらのことから、「円蔵神楽」と「浜下り」神事との関係性が、この地域特有の「禊祓」の文化基盤が媒となり、村落祭祀において相互補完的な役割を担ったことを解明する。

終章では、以上の内容を整理するとともに、茅ヶ崎海岸地域においては、「浜下り」神事に見られる文化基盤が存在し、村落祭祀の場において、共同体の構成員の頭の中で、様々な伝統文化のテキストが読み取られ、〈茅ヶ崎甚句〉や「円蔵神楽」といった民俗音楽や芸能の表現において浮遊する特性があることを結論づけている。同時に、このことが現在の茅ヶ崎市

域が近代以降著しく音楽と芸能の街として成立し、展開してきた要因であることも指摘した。

審査結果の要旨

本論文は、茅ヶ崎という地域に展開された〈茅ヶ崎甚句〉や「円蔵神楽」を直接の材料として、民俗音楽・芸能を「浮遊性」という概念から読み解いた点において注目されるべきものである。民俗音楽・芸能の展開においては、共同体の人々の間で「共感覚」が働き、口頭常套句や筋書きが「浮遊する」特性があること、そしてそれがどのように個人や集団の中で機能するかを解明しているが、これは、文化人類学、民俗学、音楽学、音楽教育学等の検討から執筆者が導き出した視点であり、独自性が認められ、民俗音楽・芸能研究に示唆を与えるものとなっている。

論文は、各章において提出される課題に対して、音楽や芸能の背景となる歴史的な文脈や特性分析を明らかにしつつ、「共感覚」「間テクスト性」「口頭常套句説」等のキーワードから「浮遊性」の機能を明らかにする構成をとっている。ただ、各章の論述においては、一部史料の読み取りや解釈、論理構成において不十分な点も見られる。しかしながら、これらの点は本論文の学術的価値を損なうものではない。

本論文の内容に深く関係するものとして、すでに日本民俗音楽学会学会誌に掲載されている査読論文「〈茅ヶ崎甚句〉の物語空間における浮遊する音楽特性」『民俗音楽研究 第42号』（2017）があるが、これは他の研究者に関連発表を促し、論考に引用されるなど、民俗音楽研究に影響を及ぼしている。これに続く本論文も研究推進に寄与することが期待される。

以上の審査結果から、本論文審査委員会は、全会一致で、本論文が博士論文としての水準に達しており、博士（学術）の学位を授与するに値するものと判断した。